

# 只見の民具にみる樹種選択の伝統的知識の再評価

鈴木海都・土本俊和・井田秀行（信州大学大学院・総合理工学研究科）

## I. はじめに

本研究では、只見町において保管されている民具の使用木材種を同定し、樹種選択の伝統的知識を再評価することを目的とする。従来の民具研究は民俗学の文脈で行われることが多かったが、本研究では生態学的な視点を取り入れ、民具における樹種選択の背景を地域の植生や生活文化との関連から分析する。

只見町には約 2,000 点の国指定重要文化財と約 9,000 点の文化財指定外の民具が保管されている。これらの民具には地域の自然資源の利用形態や文化的価値が凝縮されているが、収蔵庫に保管されたままの文化財指定外の民具については保存や利活用の方法が課題となっている。また、民具の使用木材種に関する情報は只見町方式（民具を直接使用した人たちが整理作業を行うスタイル）に基づくものがいくらか存在するものの、生態学的視点からの体系的な整理はこれまでほとんどなされていない。

昨年度（令和5〔2023〕年度）は柰目観察による樹種同定を行った。その結果、コウシキ（雪降ろしの道具）にはブナ、タテキネ（脱穀や糶摺り用の杵）・ヨコキネ（餅つきの杵）・カケヤ（大型の木槌）には主にイタヤカエデ、ヒブセ（無火災と子孫繁栄を願う民家の屋根裏の棟木に括り付けられた呪物）にはスギが使われていることが確認された。このように民具には、用途に応じて特定の樹種が使い分けられており、地域の森林資源に関する伝統的な知識が存在していることが示された。

本年度は、木片試料を採取し、顕微鏡下で木材組織を観察する解剖学的手法により樹種を同定した。

## II. 調査対象

対象とした民具は、只見町旧朝日公民館に収蔵されている文化財指定外のものであり、全てにIDが付けられ、種類ごとに整理されている。

木片試料を行った民具は、以下の9種類、計92点（全195部材）である：ジザイカギ（囲炉裏などの上に吊るして鍋や鉄瓶を自由に上げ下げできるようにした鉤）40点〔112部材〕、ヨコキネ22点〔44部材〕、タテキネ10点、コウシキ5点、ゲンベイガタ（藁靴を編むときに使う木型）4点、クワガラ（先端に鉄製の鋏先を装着して使う鋏）3点〔6部材〕、トチムキ（湯がいたトチの実の外皮をむく道具）3点〔6部材〕、カケヤ3点〔6部材〕、コイダシカギ（堆肥を掻きだす道具）2点。

## III. 調査方法

樹種判定用の木片試料を採取する際には、民具にできるだけ損傷を与えないよう配慮する必要がある。そのため、専用設計のコアサンブラー（外径7mm、内径5mm）を製作し、これを装着した電動ドライバーを使用して、必要最小限の寸法（直径約5mm、長さ約5~7mm）の試料を採取した。採取した試料は、柰目・板目・木口の断面からそれぞれ約20~30 $\mu$ mの薄片をマイクロトームで削り出し、スライドガラスに載せて保存固定液（Bioleit）を滴下し、カバーガラスで封印してプレパラートを作製した。樹種の判定には光学実体顕微鏡を使用し、木材細胞や器官の特徴を基に行った。

なお、部材が激しく炭化して試料採取ができなかったものや、試料の採取箇所が解剖学的特徴の観察に適さず樹種が特定できなかったものについては、樹種不明（同定不能）とした。

#### IV. 結果

ジザイカギの下げ鞆にはスギとゴヨウマツ類が使用され、鉤棒や横木にはイタヤカエデが最も多く、次いでコナラ属やブナが使用され、ホオノキは横木に多く見られた（表 1）。

ヨコキネやタテキネではイタヤカエデやブナが使われ、ヨコキネの柄にはコナラ属も用いられていた。コウシキには主にブナが使われ、コナラ属も認められた。クワガラにはブナが使われ、トチムキにはブナやコナラ属が使用されていた。

#### V. 考察

民具に使われていた樹種は、いずれも只見町内に自生し、近辺の山林から調達可能なものであった。また、民具を製作する際、その用途や機能に応じて木材の特性が考慮され、適切な樹種が選ばれていたことが推察された。

ジザイカギの下げ鞆には、一般的な竹（マダケ）よりも針葉樹（スギやゴヨウマツ類）が多く使用されていた。これらの下げ鞆は、断面が四角形の筒状に作られ、作り方には挟み込み型、巴型、くり抜き型といった複数の意匠が認められた。ジザイカギの鉤棒や横木にはイタヤカエデやコナラ属、ブナといった落葉広葉樹が多く

使用されていた。只見町の古民家の構造材にはスギやゴヨウマツが多用されていたことから、ジザイカギも住居の一部として、民家を建てた際に併せて作られた可能性がある。これらの特徴から、只見のジザイカギは地域特有のものであり、その文化的価値は高いといえる。

その他の民具では、適度な重さ、堅さ、曲げ強度（ブナが特に高い）、耐久性等を兼ね備えた樹種として、イタヤカエデやブナ、コナラ属（ミズナラ、コナラ、クヌギのいずれかと考えられる）が主に用いられていた。

今回の解剖学的手法では民具に穴をあけるため、ヤスリ等でススや汚れを落とす空目観察よりも物理的損傷が大きく、解剖学的手法は空目観察同定を補完する手段とするのが望ましい。今後は、空目観察の精度を高めるために、解剖学的観察結果と照らし合わせて部材や樹種ごとの判定精度を検討する必要がある。また、解剖学的手法では採取穴を効果的に塞ぐ方法を工夫し、空目観察でも木地を露出させるため適切な彩色方法の検討が課題となる。

本研究により、ユネスコエコパークとしての只見における人と自然の関わりの再評価に貢献するとともに民具研究における樹種判定手法の効率化と精度向上に寄与することが期待される。

表1. 只見町の民具の樹種構成。解剖学的手法による同定結果に基づく（2025年1月9日現在・暫定）

民具名 (点数)	ジザイカギ (40)			ヨコ キネ (22)		タテ キネ (10)	コウ シキ (5)	ゲンベ イガタ (4)	クワ ガラ (3)		トチ ムキ (3)		カケ ヤ (3)		コイダ シカギ (2)	総計 (92)
	下げ鞆	鉤棒	横木	榫	柄			榫	柄	上	下	榫	柄			
種名\部材名																総部材数
イタヤカエデ	1	17	12	13	6		5									54
ブナ		5	2	2	5		2	4	3	3	1	1				28
コナラ属		11	7		7		1				1	1				28
スギ	18		1													19
ゴヨウマツ類	13															13
ホオノキ		1	8													9
ケヤキ			1													1
マダケ*	*8															*8
不明			1						1					2		4
(精査中)		6	8	7	4		3		3		1	1	3	1	2	39
総部材数	*40	40	40	22	22		10	5	4	3	3	3	3	3	2	*203

\*目視で同定した部材（マダケ）を含む